

十燕
種石
中古戲場說

四輯

五下

1234
679
87



14
679
37

燕石十種第四輯卷五

中古戲場説卷下

附録



都々伎藝の事に見る人斗の事一幸の當分の格別漢
また此標的の事今ある事古人多く上る乃
こと此を見聞の事をいふと此四年の事也忘却も多
うらん事を識者此訂正をすべし

耳麿集

室永の享保の中迄まて京都大坂の舞舞を
ゆゑて姑の道介形後よき及今令子志丸也と云
貞享元禄の此れ名人よ此書を集め記せし書

高蒲草

元祖芳辰あやめ評判記は極とて大古位より
三ヶ津藤巻改と云位をとりし古今女形れ名人
二代目あやめ山下又ち弟三代目あやめ中村富十
あとが実父之是も伎藝の心故を記せし書也

納子の傳

元祖納子思ひおろに心故を記し又自分の發明
せし藝道の意味よりとテワキといひますとの
心故を記せし書也

右三書近頃印行の有といへとも多し其肝要斗を
むね三書の中をもつらせども平刻よりして写本
人の強しをけをいふて見て忘れぬ斗をぬよつて
訛謬がとせず猶好人の校正を俟の

一 古坂田舎十席いさく傾城実毎門一車ハサめて大やうな及ぞかうと
藝まかると大名高家の系よたうねをうのぬものなりこれ
こそそのまむけうとゆゑ子細らしく見ゆ物こそそれといふ
向の上出國のうこれ若とのこゝろをすむこゝろ知らぬ此のそと
去りし子細らしくあつらふとせ福を實の和事師みあつた
雲と子細らしくきとのこゝろが大切の利のふきりりへのかの林鶴
たり我を屋俵左衛門をち友佛の系を三友近して夜毎中流りをも
ハかあらず右のこゝろをすませし一をありと云也

一 二代目嵐三右衛門江戸市村産りし暇元二日頭心男と役者中役者共
 人も招き立振舞して彼見雜踏の次也今今の役者江戸を初くは家
 大坂を見しよとて一床のぬきよう見せしされば大坂めてね言梅の由
 二敵役三笠城右衛門長吉は家ありし金を懐中して花道を出り
 城右衛門を誘ひ甘て出てあるうらうら長吉とていふとをわけし初
 むるを川うらと色まてかたりとて天の井又右衛門がえとそれ毎
 ぬると今ををわけしとて思を後よりさむけあつるえとて
 今く城右衛門が仕舞いれら肝心茶ゆゑあり笑と魚のかりゆい
 あんぞ相のさもふとて同い事我をま其時心いさを忘
 れた皆も存むるゆゑこれい悪と云事いぢんもせし事いあれども
 急角相も此氣こころをうとむけしをりや父祖より男らぬを
 日はなうとて云

一 酒子の師匠以村長十希 実名佐中本 長右衛門 或時けいせん笑此ねを

相も此傾城の萩の八重相是又とるちんど後を立障子を
 立切り又場こうく長十希氣ぬ息も幾度仕舞てもその
 町の女房の後を立とてそれとい武士乃其子の後とて
 と仕舞ても氣は入らず八重相もまや實ふ後まゆゑ言
 もあらう障子を仕舞くまを長く長十希笑ひあうそれ
 あうそれとてゆいゆいよりその心を忘るうらうらと
 登とてさすれい實ふ後立程の出入りして相の氣こ
 ろを見えり

一 今更の吉九郎とて役者と云者かたりとてお之高りね言あれ
 幕川馬の跡はまでもう見えおあり不為のめいとの
 多人とも常より二刻も下り見えたすれい高りね言の
 時れむゆめくあらぬ時の之更とてお之大楽の役者も高りぬ
 時より見えり又い行むの時知りあるとまはは見えおの目も

あ〜〜見えぬありと云ふ是も修治の二ツあり

一 柏庭いり〜禁いん其系生れおれい素人のうち大坂高良さまの女
藤の宮傳伴惣北古市尾張名古居お〜い〜も後者よ成〜と思ふ若
何とも先芝居を見〜とまふ月今考えれば此の藝道も
にたりのる〜もをんを立役より親父も花車形實徳殿外近も
す〜松波〜の藝道の要徳と云〜むも我も先年親父形を京於大
坂江戸ともに二三夜も仕〜れとも是の役者さ〜む〜を播作のこ〜りの
親父も花車形若女形娘〜道介も娘〜の〜と云ふ〜ふ〜り
〜花の年の若の御〜程も若気形〜門を助神屋系
市松あ〜若気形ふ〜と〜出来〜と京大坂〜も若氣形菊の
糸三糸代三糸あ〜と〜ふ〜出来〜と出〜に迎年〜と娘〜
法方を兼て勤る親父形花車形〜の有りもあ〜てもあり

自然と云ふ〜り追付居り方若気形も止〜〜よう〜ぬ事と云ふ
いたも名人の見〜と云ふ〜り〜今〜強らば立役より勤事
たりの割〜立役より女形近當た〜世の中〜ありぬ

一 元祖治考市村雲の女鳴神大當り也〜其甚治考が〜不快と
盆後追門〜休の月ある心易きりのありと云ける當年の鳴神
大當り也綴綴乃衣珠数柄香爐推〜ての出来殊傍ら〜見えん
ふり〜心をや〜と云〜行〜れ〜思ひ入〜て大當り
〜の心得あり〜やま〜ありと又月節〜り又糸十糸夜討を
鳴神の一念よ〜幽霊の面辨や〜も常ふ習〜り〜もあ〜
あ〜り英〜〜も癖凄み強〜見おの中男が〜とす〜を
〜〜のたり〜も三夜も見〜〜は〜と妙〜と思ひ〜ふ〜
〜心〜い〜も常〜習〜と〜思〜り〜い〜と〜治考〜
〜持〜て〜介〜あり〜一辨鳴神の女〜お〜わ〜と女十糸〜どの〜ん

懐く敵二君をうんと十節を討死す極を去れし事九年
祐威を執りてこそあつたそれ故に逆次郎の程を瀬壺の封とありて
云々ねらう大筋を察りてこれ大筋と云ふにあらざるも斗も得比危
少ありしを十節を行時も去れぬと云ふをさしむ切の幽霊又
白衣観音あつたをうり常れ女形の顔のらららる事さしむ
き髪の色を去らざる思へしなりん幽霊あつたを若女形の顔
のらららる事さしむと云ふ見せんともあり及も実懸れ仕うち
女形のいきにあらずと云ふこと

世中の一々集りて中村の一人をあらす是を定暦三箇三月昔時
巴を九節とらしむ茶屋へ行く時悟えぬて公男くせむに
云々色をひるも若くも知るのありこれ若伴の巴を二階
のしむをこれ物語に記し虚實の家ありてははしむのあり
はしむ

古人中村富十節 慶子の古人名人あやめが子の人北ゆをせしむ名
人よく極よく去るとまて評判記の位を付し若ありし先年大坂の
揚羽の長者と云ふ若丸の男達をうてたは當りしと云ふ事ちり沙汰せ
しを瀬川仙真ゆりて扱へ 慶子の程をうしむ道乃心づけり
なりと云ふ中村若丸仙真が子の妙後の女形ゆりて汝さいうや
何ふ仙真若丸慶子の程とせしむめて女形のまさをさしむ若丸
も哭くられぬと云ふびりりあり何事しとあり見物ふ若丸
と思ふ心もゆき若丸をうしむ人を投り切りしとありて若丸と
せしむたつた若丸をうてて止ればゆきしもたれどもそれら
つた癖ふありしと云ふしむそれがあつてあるおころを以て女形を
の服でしむるをうと云ふしむと云ふと格別のかいさ面白し成程
仙真がうひしむと云ふしむ中村若丸若丸は長者の若丸
形をせしむ海丸がこいしむ若丸は若丸の若丸

心ちしるるに後も本村田舎を頼るに三希あり野塩夕
多芳唐及子孫を伴九郎の身づくこのいふ大切竹接
又此れ荒事と稱するも同坐する是も此れ不相のゆく若丸の也後
親聖法師乃場改中を有く一宗法ありは向白當を宗
法と見あらはさる場也極よのいふこと女形の舞の甚麗れ
して又その後市村座七変化の名家悪好と云ふこと心わき連
中の多子いふ氣の妙法ありたまふこと氣れどくわりし慶
子むすとい相慈を生うつことと云ふ極よあれど自然と本場の
親玉と云ふかきつて之も見るにけいふも悪と家の海丸とし一舞
慶子美用とての心得遠くと見えたり初てともも参るわい
あゝあがりけりさきさきの身もさびさびあり又
も女形のま役めさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
してあゝあゝ思ふに下りの常なりと江戸には天と云ふいふあり

日用の続もかたりた嘘もあればうそなり一歩もあり
るが親々見えさせ事めらるせらりとも出た二丁所
よりわくわくさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
日用は害ありかなりともさきさき人生れ有用めも
書もかぬもたれり事と云ふ事にて解の難
と云く

1000
1000

文化二乙丑年八月雨此比

許魯望觀主人

戲述

心ありありと後も花梅田中を喜程きりて三希あり野塩夕
も方慶子孫を伴ふ時海丸の身ぶりこゝろいふ大切竹接
又此れ荒事と雖も同坐する是も此れ不相容なり若丸の也後
親を法師乃場改中を有く一葉落るありはら白當を京
法と見あらはさる場も極よのといふごと女形の辨り甚なれ
し之又後市村座七変化のの家要極とてと云うごとむわさ連
中の慶子のいふ氣の妙法ありと云ふまじきとて氣にぞくわかし慶
子むすといふ極を生うつと云ふこと思ふ極子あれど自然と此場の
親ととなかたつとて思ふも思ふがけいふも思ふ家の海丸とし一辨
慶子美用とての心得遠くと見えたり初てともも思ふわい
ありありがけとて思ふのちが自分の身ももさびとてあり又と
も女形のまじりめとて思ふも思ふとて思ふの思ふ女形ありとを
してありとて思ふといふ思ふの常なりといふ此れは天とともいふあり

日用の続もかたりた嘘もあればうそりかたもありあ
るが親とて思ふとて思ふ事めてうせらとて思ふ出た二丁所
よりありありとて思ふ事めてうせらとて思ふ出た二丁所
とて思ふ耳に底とて思ふいふとて思ふ一書紀一書紀といふ事でも
日用の害ありかたなりとて思ふとて思ふ人生れ有用めもなりとて
書もかぬもたあり事とて思ふとて思ふ雑者あり
と云く

文化二乙丑年八月兩れ比 計魯里觀主人 戲述

文の
つぎ
よ

京都之卷
雜劇古今名簿錄
附名家畧系

元禄末年
始近之名系

江都三座大歴示

名也男名人
中村七三郎

同上
中村傳九郎

同上
生鴻新又郎

同上
宮崎傳吉

同上
勝心又又郎

同上
横心八郎次

元祖
市川團十郎

同上
猿若心左衛門

元祖實恩
中嶋勘左衛門

同上
村山平右衛門

元祖
松平幸四郎

同上
早川傳又郎

上白 音羽次席三席

親父上白 四宮源八

道介名人 西園玄二席

實悪 中平 九席

江戸七五 丈

敵役 大熊宇田右衛門

坂東又右席

大谷廣右衛門

上白 仙石彦助

中嶋三右席四席

市川忠四席

若林口角又席

中嶋三南右席陽治天神任

市川忠藏元祖七年口人

西園玄助

南北孫右席

小川善又席

宮川八郎左衛門

香妻藤藏

上白 早川初瀬

萩野沢三丞

嵐 喜代三席

藤村才五

袖崎三右 流後之坑和右衛門上之役之

袖崎和秀浦

元祖上白 澤村小傳次

袖崎心右席後市川九郎早世

上白 津川かゝん

山嵐和秀腔

早川新蔵

己下享保才予 見一 名目あり

二代目 市川海老蔵初名九蔵

元祖古今名人 澤村宗十席

元祖 大谷廣次廣右衛門

元祖 大谷廣右衛門敵才道役

大谷始東側 鬼次後廣次繼任之号十町

元祖 坂東彦三席中實事或道より打

松平章四郎後本場親玉十三代

上白 坂東彦三席菊水

三代目 市川團十郎 号徳兵衛

四代目 市川團十郎

七代目 市川團十郎 白猿娘出生

市川八百藏 實父 松島春彦平次 始者三郎 忠花

四代目 市川八百藏

市川團三郎 實子

澤村宗十郎 始者三郎 早世 河子深川住

三代目 三伴金助十郎 後白猿七九郎

五代目 市川團十郎 始者三郎 幸藏

松平幸四郎 始者 高藤春彦 幸考

市川八百藏 二代目 豊竹和泉左之丞 後中村傳藏中車

二代目 市川團藏 江戸出生 三河屋

二代目 坂田藤十郎

澤村宗十郎 始者三郎 市川團藏 早世

六代目 市川團十郎 早世

市川雷藏 始者 玉拍

市川八百藏 三代目 始者 沢村金平助之丞

三代目 市川團藏 上方座

二代目 市川雷藏

澤村宗十郎 始者三郎 早世 河子深川住

三代目 大谷廣次

坂東彦三郎 實子 美男

三代目 中村七三郎 娘形

二代目 中嶋勘九郎 敵没切者 實子

二代目 中島三甫右衛門 天幸

敵没 坂田半次郎

三代目 中村助八郎

四代目 大谷徳八郎 始者 三郎

坂東彦三郎 河吹末子

一代目 萩野伴三郎 初丁

三代目 中嶋勘九郎

中嶋勘九郎 天幸門弟 早世

坂田半次郎

市川宗三郎 元祖 實忠七郎

大谷鬼次

二代目 中村七三郎 後号 少長

萩野伴三郎 始者 上紋三郎 又坂東三津幸助

實子 中島三甫右衛門 号 天幸

元祖 敵没 中村助八郎 實忠七郎 早世

二代目 中村助八郎

三代目 市川宗三郎

弟子
市川宗三郎

立役 歌役 上代切
富澤半三郎

初代 上代 如竹留巳子助
坂東三津五郎

二代目
坂東三津五郎

下代
新九郎 上代目
中 心 丈 七
後伴 吉 茂

歌役 半道
鳴見又五郎 四郎

鎌倉長九郎

成川十郎 友 茂

市川 辨 吉

市川 勘 藏

澤村 長 十 郎

以々の北軍除之

鶴屋南北

嵐 音 八

音八次男
坂東又五郎

二代目
嵐 音 八

市ノ谷三五七

道介
市川 心 藏
初代 門 人

金子萬徳

中村吉三郎

中村八十吉

花車 上代
澤村源次郎

全
橋本大次郎

全
玉川右九郎
後出家

全 名人
袖 固 故 之 助

立役 後実 恩 海 九 郎 子
津 打 門 三 郎
後津 心 友 茂

娘 女 形 辰 之 助
富澤 辰 十 郎
後立役

紀伊國 谷 初子 門 中
澤村 中 藤 藏
娘 萩 野 茂 房

中村源吉郎

中村竹三郎

三 條 勘 吉 郎
後 花 井 吉 三 郎

後立役 和音 浦 幸 郎
袖 濟 和 音 浦

袖 濟 三 輪 の
同 い せ 世

心 本 花 里

元文の頃 系 子 三 条 波 江
心 卜 亀 松

嵐 富 之 助

嵐 宇 源 吉

玉澤 林 彌

玉澤 吉 次 郎

元祖不化 地蔵名人
瀬川菊之丞

地蔵世話 武道名人
瀬川菊次郎

二代目女形
右妻藤藏

瀧川哥川

二代目室井 殊吉
澤村小傳次
森田勘弥

右妻信子 早世
中村吉藏

二代目 考
瀧川菊之丞
王子生

三代目
瀧川菊之丞
末二記

嵐 吉彌

嵐 表代十郎

嵐 三勝

岩井表代十郎

表代十郎子 江戸三子死
心平京藏

尾上菊五郎

荒市実恩 神湯菊三郎
市川丸團次

姉川大吉

嵐 小伊三

荒市実恩 神湯菊三郎
市川丸團次

元祖若丸形
依の川市松
世話女形十子

如坂東愛流
依の川市松

如中村余四郎
依の川市松
後市川荒立郎

元祖九下若丸形名人
市川門之助
極上上吉 京子保半早世

如老松又春彦
市川門之助
流の巻新車

新車子 如糸之助
市川男女藏
新車

出来鴻平八

嵐 流三郎
姉川大吉

流川氏五郎
同 常盤

五代 初代道介
右妻 藤藏
上三子死

四代目如松中幸彦
右妻 井半四郎
世話事 上吉 後松中七彦
社若

六代目
右妻 井半四郎
如糸三郎

京より 公道地蔵
小佐川常世

元祖 朝比奈名人
中村傳九郎
二代目勘三郎 流若幸傳九郎十号

二代目 如勝十郎 立役
同 傳九郎
如荒幸

三代目 八百三子
中村傳九郎

市村羽左衛門
室井早彦 元始竹之長何世

市村羽左衛門
如由彦又龜彦家指

実子 如七郎又龜彦
市村羽左衛門
龜全

二代目 中子
小佐川常世
如七彦

三代目 如考門中
瀧川流之助

三代目
瀧川流之助
如市心富三郎後
如川富三郎末吉
兼子退下号ス

同人 門中
同 流三郎

如如流
森田八十郎

八十郎子
森田勘次
尚時若元形

氏後者
中山富三郎
新五郎 文七 中山 十九郎

松平茂三
松平十郎後
実恩

京都大坂混雑

元禄より徳治の上より名人江戸へ下らざるも多しといへども其大概を覚しゆしゆ江戸へ入りし江戸は平を以て入分乏

大和屋甚之助

坂田孫十郎

大和屋甚之助

山ノ下京右衛門

山嵐三右衛門

山ノ下柳心小四郎

瀧岡彦右衛門

荒木甚次右衛門

市の谷十郎甚之助

上白 藤田小平次

元祖上白 坂東彦三郎父
松條塚左衛門九郎

中村四郎五郎

上白 小佐川十右衛門

葉崎林左衛門

杉心勘五郎

元祖 岩井半四郎

上白 澤村長十郎

上白 姉川新四郎

如音羽次郎三郎

小の川字源次

元祖 小江新七郎
柳心平右衛門

上白 実恩 三笠城右衛門

小の心字治右衛門

初代 櫻心左九郎

福田園右衛門

如大島道右衛門

如片心小九郎

初代 片岡仁左衛門

孫川武九郎

澤井園右衛門

道介上
山田基八

金子吉九郎

天の井又右郎

頁一首源三郎
後三役

古今新九郎

正徳末より寛保 延享 宝暦 明和の頃までの

三役大概

中山新九郎

中山文七

市山助五郎

三代目
嵐 三右衛門

初代
嵐 三右衛門

養子
中山新五郎

上代
若岡又右

初代
若岡又右

二代目
若岡又右

中村十藏
獅子吼

二代目
中村十藏

上代
民谷四郎五郎

山本京四郎

深の井半四郎

二代目
山嵐三十郎

山ノ下又右郎

市の川彦四郎

古今不化名人
山佐渡七五郎

山民谷十三郎
口弁入弁改

藤川平九郎

上代
山嵐七五郎

藤塚嘉九郎

上代
三保本依九郎

上代
八塩武右郎

嵐 勘四郎

上代
若川半三郎

今村七三郎

大谷廣八

山市山傳五郎

山中山新右郎

比笠屋又九郎
二代目後今八絶

南北三姉

合點弥九郎

元祖 古今名人

比澤富三郎

三津惣意改柏倉権七

比嵐 表代三郎
お七の元祖

加茂川の〜

尾上左馬助

比淡尾為十郎
奥山

上道介
松浦茂平次

小倉心百助

二代目 比澤富三郎と

比神心小四郎

元祖の頂

比玉川半吉

比瀬川竹三郎

市村玉うわ

比岩波千壽

比片岡仁九郎
三代目

道介
大松百助

比嵐 他藏
後難助江戸子死

比中村千満

比上村吉満

比水本辰三郎

尾上多賀三郎

比岩波龍江

會澤の末 始は澤守松

三條波江

比中村富十郎

比嵐 和ら野

比富澤門三郎

比心 市原藏

あらし離助

澤村國吉郎

比淡尾十次郎

比依の川子菊

比辰岡久菊

比姉川千代三郎

三保本七吉郎

比芳澤あやめ

中村表代三郎

比岩波尾上

上
比萩の八重桐

比依の川花妻

比心川金也
初代子

あらし小六
後難助 離助

比淡尾元五郎

中村条三郎

心下八尾藏

尾上多見藏

中村松江

後里江

初代 中村の井花

中村の井花

尾上澤いふは

上 尾上 沢いふは

如之布一又嘆之而

大蔵予り是一通り暗記し書之室永心徳よりの特判紀大く亦
持せしを先年頼火のきめは焼亡しゆこととそく是を書き
しを記ぬ定く相違多うとてある人あれを訂正あはば
孫室あしんと云余

初瀬 早川権九郎

初瀬女形より之役ふたむく勤まといども女形の相違
せす依りくるもたう女形は慢を

袖 初瀬 和子川金十郎

是も女形袖清和子浦之役となり勤まといども
初瀬と同くま女形の慢を

袖 初瀬 和子川

女形より之役ふたむく勤まといども女形の相違
せす依りくるもたう女形は慢を

藤村半十郎

女形より半十郎と改之役と改二年勤又女形あり
女形ありし半十郎と改之役と改二年勤又女形あり

三 條 勘吉郎

江戸根生女形めは甚量よくあつても上りありしが元文の初之役
名に改之役と改之役と改二年勤又女形ありし
改の中村座より勤

富澤辰十郎

是も辰十郎と改之役と改二年勤又女形ありし
同女形をせしがるも改之役とありて市村座より死を

尾上菊五郎

女形より是言の改之役よりり甚量よく改廿七の年ゆえ
甚い力なき若く若く改之役と改二年勤又女形ありし
改之役と改二年勤又女形ありし改二年勤又女形ありし
と車引ありしと改之役と改二年勤又女形ありし

高麗屋
松幸四郎
錦江

松幸四郎良く名に元祖其後本場松中七藏子女形
幸四郎とて之收之松中後子息の幸四郎を幸四郎と
号し其後今も通る之松中松三郎其子市村彦之
出元文五年春松中全吉を後中村彦之瀬川菊次良
門人と云瀬川全吉も若元形ありし中元服して
孫次と号し本場の子と云市川氏十郎其後
孫次郎より高麗屋を後松中幸四郎と号次高
麗藏を子に譲りし也

本場の高麗一堀の松幸四郎初より一年とく
孫幸(松幸)四郎をゆり海老蔵とある

三代目八百蔵
助高屋之助

甲子十月改
市村彦之助勤

四代目
市川八百蔵

岩井氏三代改

伎藝名家系譜

元祖
市川女牛

團十郎

知名海老蔵

下総國市川村産

二代
柏延

其角門

号女牛又柏延

後團十郎 父、知名改、海老蔵ト号

三代
徳辨

井五良

團十郎

早世

實父三井屋助十良

四代
海丸

五粒

亦幸四郎

海老蔵

五代
三井

團十郎 蝦藏

始松幸藏幸四良

七五二門猪地之隠居

六代
三井
團十郎
幼名海老藏

七代
三井
幼名七之助
團十郎
當時市村座出勤

● 訥子
幸氏三木氏 始善五郎 又喜十郎 宗十郎
長十郎門弟 後年 助高屋高助卜号

實子
電三郎
故有塾居之死

澤村
春五郎
後宗十良 深川住

歌川
四郎五郎
後宗十良 京都三死
始曙心
訥子
紀伊國屋 幼名田之助
實子 後宗十郎

實子
源之助
當時市村座

田之助
源之助弟
女形

● 十町
 元祖大谷廣左門實子
 廣治
 東洲
 駿河屋
 始辰松文七
 後坂東又左良
 又大谷鬼治
 号十町

丸屋
 壽町
 始兵次
 号十町
 後鬼治

新水
 号坂東彦三郎
 伯父篠塚次良元
 如名菊松

新水
 如名菊松
 彦三良
 美男
 早世

真ノ實車太刀打ノ名人
 曾我ニテハ工藤鬼五ナド
 柏延訥子モ称美ヒト云

新水
 彦三良
 如名喜五良
 美市村河虹末子

元祖牛牛門弟
 初團之助
 市紅
 荒車愁款上手
 市紅
 團三良
 團藏
 号三河屋

弟子
 市紅
 始友藏
 團藏
 團三郎

道外上手
 仙石彦助
 三都共アタリ
 魚樂
 始仙石龜左郎
 後助五良
 少長弟子ニナリ
 号中村助五良

實子
 魚樂
 始助次
 後中村助五郎
 近年顔面魚樂トナリ
 助五良
 始助次
 中後者

元祖半五良

● 杉 暁
享保十九年死

杉 暁

實子ニアラス 始仙國左十郎又坂田左十郎
田川彦十郎トイハル
道外方ノ子ナリ半
五郎上手 正月屋

杉 暁

始坂東熊十良ト号ス
後坂田半五郎ト改メ早世

● 中村傳九郎門弟
承乃 鶴
榮屋

仲 藏
中少十郎

仲 藏 始大谷鬼治
後仲藏ト云 早世

● 元祖
路 考

中年京ノ商人三十余ニテ女形トナル
菊々魚 濱村屋

二代目
路 考

養子 王子村 農家子 路考見立テ 乞請
始 吉次 後菊々魚

三代目
路 考

始市心富三郎 又瀬川菊三良
菊々魚 今以俳名舞臺ノ名トス
文化五戊辰土月改 仙女

弟子

路 之 助

文化五十月 路考ト改

月
路 三 郎

同六巳年故有テ中村里好ト改
仙女ト義絶

● 元祖路考弟
仙 奥

号菊次郎 地藝ノ名人 後ナシ惜ムベシ

大坂三代ノ座元ノ名 始松本長松又松幸七藏
杜若
岩井半四郎 實父 西川十三郎
半四郎 始松三良

久米三郎

都三俳優 畧系譜

江戸浄瑠璃 江戸三座芝居ニ出レハ芝ノ字ヲ記ス

江戸元祖 三三 薩摩手 浄雲 次弟右工門 剃髪ニテ浄雲ト号

實子 薩摩手太夫 次弟右工門 大薩摩手 次弟右工門 主膳太夫 三座芝居 三用ヲ元父始テ

芝 薩摩手 外記太夫 式部太夫 若太夫 氏目 市村羽左衛門 何野并 若三良

土佐少掾橋正勝 土佐右夫 虎之助 土佐右夫 元父實保 延喜ノ頃

長門方丈 ———— 肥前方丈

江戸半太夫

半々即後刺髪シテ坂本梁雲ト号

江戸半太夫

梁坂ト号ス元文ヨリ寛保ノ頃マテ

江戸太夫河東

河東

河東

始藤屋中平治
吉原揚屋所ニ住ス

江戸藤十郎

二代目河東ガ弟子師ト絶テ別家トナル

江戸双笠 二代目河東門人

是モ師ヲ別家ヲナス

沙洲

深徳ニ号ス新屋平四郎ト号享保未ヨリ延享寛延ノ頃專ラ嗜セ

二蝶

世間二代目河東ガ門人之
其外多ク畧ス

蘭洲

元島屋平三郎二代目河東門人
名高キ唱家ナリ

元祖藤屋中平治
舟波太夫ガ弟子
櫻井和泉方丈 一代絶家

右名借コキ平治ト云場所ニ橋をトクニ志アリ
其ノ文句ニ流リシヤコ公平ガ鬼を挫グ事ノ多ク
予も其本をミテリイニ事ヲ知ル今平死セ
事を知リシト不審リニ事ヲ言マシ公平ノ様生ヲ知リ
事トシテ中々せし申享保ノ始メありニ予七八ノ頃
まできんぴらト云テ小唄をウツヒニ七十餘年ノ
ひう〜にありぬ

大坂
津福理元祖

伊勢鴻宮内

宇治加賀方藤原好澄

始嘉太夫
是ハ母ノ事ハ景子前ノ元祖ト云フ

井上播磨少掾藤原要榮

モトヨシ

号市部少掾
音聲家の祖なり可也

竹本筑後少掾藤原博教

ヒロノリ

始義太夫
俗稱天王寺屋五郎兵衛

竹本若右夫

後三流豊竹城前掾ト号系別ニ記ス

竹本頼母右夫

曰陸奥彦右夫

陸奥茂右夫

上ヨ

竹本此右夫

後豊竹筑後少掾ト号
系別ニアリ

竹本和泉右夫

上ヨ号志海
累年道以の上ヨ

曰陸奥薩摩右夫

竹本播磨右夫

政右夫中奥名人
俗名長四郎
此外門人多シ累々

竹本大和右夫

門人別ニ記ス

播磨掾門弟
竹本陸奥右夫

平野屋大右掾音聲左双

竹本大和右夫

大和右夫弟ヨ

始三輪右夫 内匠右夫 大隅少掾
豊竹産之者ナリ 豊竹上野少掾ト号ス名人

竹本河内右夫

後豊竹産之者 駿河右夫ト号ス

竹本春右夫

竹本筆右夫

竹本内匠太夫
 竹本若狭太夫
 竹本千賀太夫
 竹本出雲太夫

世外門人多し累々

播磨掾弟子
 竹本政太夫
 竹本政太夫
 竹本住太夫
 竹本信濃太夫

始小政太夫 近來名人
 俗名十玄浦

始中太夫 俗稱初音

竹本政太夫
 竹本政太夫
 竹本政太夫
 竹本政太夫

後上総太夫

竹本七太夫
 竹本伊太夫
 竹本長門太夫
 名護屋播磨太夫

上り 俗アマシホト呼ブ

始雅樂太夫
 一度竹本美濃太夫

竹本錦太夫
 竹本越前少掾藤原敏系泰

竹本院後門弟

始若太夫

元文六年江戸へトル鉢ノ本出語人皆感之年六十五
 寛保元年江戸ニ下リ鉢ノ本并枕物狂い本出語人皆感之年六十九年七十五

豊竹要太夫
 豊竹条太夫

豊竹肥前少掾藤原清正
 始新太夫
 門人多しコレ累々

豊竹若太夫
 豊竹十七太夫
 豊竹島太夫
 豊竹加賀太夫
 豊竹村太夫

始竹本寫太夫

始八本太夫

豊竹伊勢太夫 一夏肥前少掾
後新太夫

豊竹文字太夫 大和屋武吉清

豊竹岡太夫 又吉清

豊竹鐘太夫

豊竹駒太夫 一丸江戸へ三下下ル

豊竹丹後少掾 始林太夫
器正
富澤町住 江戸二終門人多シ
表徳ニ推字ノ音ヲ用イキヤウ云

豊竹喜美太夫 辻兵助

豊竹松太夫

豊竹筑前少掾 始竹本此太夫
藤原為政
豊竹此太夫 始時太夫
豊竹伊勢太夫 始佐太夫 後号豊竹伊勢
竹本友太夫 兵助
豊竹薩摩太夫 系四郎名清 花井
豊竹林麓太夫 始茂太夫 門井
須磨太夫 浦太夫

山本角太夫 道具屋ナリ故ニ
道具屋アト云
表具屋又四郎 表具屋アト云
又四郎ガフエラト云 作畧シテ一流ヲ紀ス
後耳ヨカリシト云 辨フニ付上云

京都
岡本文彌

都太夫一中 岡本一抱子
近松門左門ガサノ揚弓名人百中ナリ云
昇下シテ申ト号ス 享保ノ頃江戸エトリ名ヲ上ル

都国太夫半中

後受領シテ宮古路豊後椽ト号
一流ノ祖トナル

都秀太夫

是又千中ブシト云知戸河東ト交リ角田川船ノ白ト云ハ
河東トカケ合ノフシ付ニテ名高シ

宮古路文字太夫

後常盤津ト号ス
俗名 駿河屋文左門

宮古路加賀太夫

後富士松薩摩椽ト号

宮古路綱太夫

宮古路敷馬太夫

後松本ト号下品ノ一流也

富本豊前椽

始宮古路品太夫 後常盤津小文字を夫
後師ト絶ニテ別家トナリ一流ノ祖トナル

富本齋宮太夫

後剃髮シテ延壽齋ト号ス俗モクサト呼ブ

富本豊前太夫

一中豊後

知名馬之助ト云計ニテ孤トナリ存宮ガタニ補助セラレ
始豊志右夫ト号ス今専ラ流行
千中文字右夫等何レモ門人多シ故ニ畧之

朝日若狭縁

始宮古治敦賀志夫ト号シ加賀志夫高弟ナリ
後年師ト絶メ受領セシガ程ナク死ス近頃流行
セシツルガ新内ナル者ハ若狭ガ弟子ナリト云

寛延宝曆ノコト北廓ニ春富士正傳ナル者アリカレハ京都ニテノ
豊後節也正傳ブシトテヤ、流行セリ江戸ノ音聲ヨリハ
奇麗ナリト云

大坂服座

延享ノ頃ヨリ寛延宝曆ノ始マテ芝居真似ト云ヨリ
永ク絶セシト云

明石獄後少縁

始森川志夫ト号ス播磨門弁後内匠ガ音節ヲウツシ
名ヲス江戸ヘモ明石森志夫テナル津福理寄形ノ新旭ヲナシ
其後断絶

陸奥竹小泉志夫

ト櫓を上實ハたノ佐和志夫ヲ芝居の由

陸奥竹佐和志夫

世話事かろくまのしよ

津福理是も三ツ斗ニテ新作ナシ真似セリが宝曆の
ころの断絶せり

作者部類大略

江戸上古サツマブシノ頃ノ作者

北条宮内

何レカ神職ノ浪客ト云又倍長
ノ仕ヲ辞セシ人ナリトモ云

岡清之衛

江戸古耕士ノ祖匠之ヒ
一生太平記楠ガ軍ノミ證シ

塚原市左エ門

是も或ハ藩中より出シ
浪客ありしと云

土佐外紀あとの文句も多分
是れ作事と見ゆ

・竹婦人

始吉原に戸町天満庵に在りし。其偶家之五十才斗りより
判發強居して深草山馬道知泉院俗文箱地蔵地面は庵を
トして俳諧の長者とあり岩中乾中と号す俳達源枕何ぞと
のむをさとり其雅文ゆへ二代目の河東頼る文句を作らせ
り其中にも挑灯の紋を竹馬の鞞。水調子。ぬき扇。いの字
扇。ちと絶唱とくくりてまやせありや俳諧の師ありん
殊もよく知りしもの俳名。吳丈ト号し後に乾行ト号
す竹婦人の別号庵号を満足庵といひ又十歳児にも鷹一
叟とも号せし其外益益其後を教員せり
性甚猫を好み予が舎せし其猫十二止ふるなり是又
一癖ありしや

宝曆九年の春死

以年八十

辞世

魯解や八十年の法を架物

京浪義作者

荒後庵

・清久三希玄傳

・錦文流

其の終
三号ス

・紀海音

豊竹庵

元禄多我と云亀心敵打の書も作る

近松門丸萬

平安庵

菓木子

始蔵學の僧ありとも云か氏杉森
ましく播紳ははらあまを仕を釋し元禄の以より其
芝居るを其庵の作者より其心後大坂より竹幸荒後庵此
作者をせり世話作者の面と稱を京都より名をあせり醫師
也か一抱子が中絶をま一中が兄ありと云津福輝の作者あると
せし中一世代と号せし。雪女五枚羽子板。國性父那合戦。
曾我會徳心國性父那ハ十七月せし入りし其衣裳を始て三

仕進せし友友今の高りと云ふべし。ゆき板の藤岡を帝と云ふの
 五人は兄弟吾意を内を五段のゆき板に作りし友三や會替の
 五月廿八日七時より廿九日の明あつたを又段と書し友と云へり
 享保八年卯七月七十有年と死するがゆかを云ふてたて
 りし辭せしと云ふ人ありしをそれ辭せしと云ふもその後より
 櫻の花は白く

豊竹産
 ●西澤一風
 ●後田一蝶
 ●春草堂

竹本産
 ●竹田出雲 号文耕堂
 ●安田陸文
 ●並木宗輔

全
 ●竹本三郎之侍
 ●為永三郎之侍 号十蝶
 ●師岡橋平

竹本産
 ●吉田冠二
 俗名文三郎本偶き
 ●豊竹應律

右外も有之といとも終る多段僻作ゆき板に多しを思ふ

江戸

福内鬼外 俗稱平賀源四 号風来山人 紀上太帛 烏亭焉馬

此外もあれとも定りしは是を除く暇ある時可考

序
 米乃姓と米境のありと人が借さぬと是去るより三種此
 神室よりを金員ををりしをさぐりも抄くはりし系

あらず出川見よ深川新篇を著し即二町ま地を通り
たりありあれを著しあらず事がある心と世書のみどを著し
まゝいあくあれあくとを性てん法合員之躬を著し 雅楽と
綴る序す

後序

友人滅法子来り世系譜を見て地り投下して曰是下あし書
著述せ然何の爲りをもや人生日用ふ益あく知りて功あ
あらずとも可高理抑屈の中をもちるなもあらず寧ろ紙あ
ばうせをむいし時水をかを拭む世書以かきえんをゆあう
文字のゆり紙いふる事よくいふく我えより人より益ある
為り書せし人生有用乃書る今や汗半克棟叙陰ヤツフ
何ぞ不佞と記の口説以ゆらんやあぐ居るよりいと及古の裏

かいて見よのそ見たがふ背念佛より外あるの純物無念
塩さんま何あもあるの世も三一人金つあや、かねが
ほいしや家のまより引くあや、貸るわいしやとさ

明治二十一年晚春

筆者

妻木頼徳



